

Title	重度神経症群の境界反応浮上力動：自己愛空想による鑑別査定仮説
Author(s)	川村, 良枝
Citation	聖学院大学論叢, 第 26 巻第 1 号, 2013.10 : 1-14
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4572
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

重度神経症群の境界反応浮上力動 ——自己愛空想による鑑別査定仮説——

川 村 良 枝

抄 録

現代増加している「キレル」、「引きこもる」といった顕現様態を示す、外的現実と適切な関係性を営めない、そして容易に人格障害と見なされる臨床群の中に存在する重度神経症群を、人格構造論的、発達論的に精神分析理論の観点から検討した。そして、自己愛空想概念を中核に置き、重度神経症群の人格構造の問題を、エディプス期発達における三部構造の確立はなされているものの、潜伏期前期から発達する心的空間の発達不全があるものとする仮説を構成した。また、重度神経症群の鑑別のための力動を、精神病性人格構造、境界性人格構造、高次神経症性人格構造との比較において仮説構成した。

キーワード； 重度神経症群，境界反応，自己愛空想，鑑別査定，潜伏期

1. はじめに

攻撃性の暴発、すなわち「キレル」ために、あるいは不登校や引きこもりなど対人関係における非情緒性により自らに「引きこもる」ために、外的現実と適切な関係性を営めない様相を示す患者群が昨今増加している。しかし、このような患者群の中には、精神療法の予後の良さを示す「神経症」群が存在することを、筆者は日常の臨床の中で感じている。一方、DSM-IVやICD-10による精神医学診断や、構造化され広く用られている Kernberg, O. F. (1984) の鑑別診断の基準では、彼らは容易に人格障害、発達障害、あるいは境界性人格構造とされてしまい、適切な治療を施されない現状がある (川村, 2009a; 2010)。現代増加している「キレル」「引きこもる」といった顕現様態を示す、外的現実と適切な関係性を営めない力動の常態化は、人格障害の特徴と見なされるものであるが、神経症的であり常態化していない場合、それはどのような精神的力学によって起きると考えられるだろう。この点についての議論はほとんど起こっていない。Kernberg, O. F. (1996) が、精神疫学的変化が起きた場合、簡易化された行動記述的診断は常に力動的理解に立ち戻りカテゴ

リーの再検討と再構成がなされる必要があると指摘しているが、今、まさにその時だと言えよう。Kernbergは同論文の中で、「神経症性人格構造を有する人格障害（強迫性人格障害、抑うつマゾキスティック人格障害、ヒステリー性人格障害）」を仮説的に示している。人格障害でありながら神経症性人格構造を持つという、一見矛盾したような群が存在すると考えたのである。Kernbergは、当該群は欲動領域に特異的な退行反応を示し、その反応が人格障害的反応であると説明しているが、彼のそれまでの研究からこの仮説生成に至った、発達論的、構造論的、局所論的考察は見つからない。そのため、この仮説についてその後発展させる者も見られていないのが現状である。このような背景から、本論は「キレル」「引きこもる」顕現様態を引き起こす力動を、力動的・精神分析的理論から再構成することを目的とする。

2. 理論検討

1) キレル、引きこもる力動 「キレル」顕現様態、つまり衝動的な攻撃性の突出は広義の行動化（acting out; Sandler, J., et al, 1973）と定義されるものであるが、これは恐怖対抗反応、依存対抗反応、敵意対抗反応などの対抗反応防衛（Counter Reaction）であり、自己愛が傷つく、あるいは自己愛が枯渇することにつながる恐怖・依存・敵意といった情緒が意識されるのを防衛する反応である（McWilliams, N., 1994, pp 139）。また、「キレル」現象は、自他の境界が曖昧で、自己対象と現実における外的対象の混乱が起きるために、投影性同一視の先鋭化が起きることからも説明される（Klein, M., 1946; Ogden, T. H., 1979）。つまり、自ら保持できない恐怖・依存・敵意といった情緒を他者に投げ入れて処理させようとする二者期力動が働いているのである。また、投影性同一視を用いている主体は、「投影物と一緒にいるような感覚」や、「自己の一部が他の人の中にあるような感覚」を持つ特徴がある（Ogden, T. H., 1979）。つまり、投影性同一視には二者期的な「幻想体験」、言い換えると、幻想的他者からのリビドーを自らに備給しようとする力動的特徴がある。

引きこもる現象の力動的説明はFreud, S. (1911)の記述に遡る。彼によれば、引きこもった先の願望充足的な幻想の特徴は、夢とともに現実原則に支配されない領域として存続し、特にリビドーとの間に密接な関係が生まれる点にある。また、このような現実を考慮することのない幻想領域は、自我の発達に伴う現実検討を受けることなく無意識の中に留まり、幼児的な心性を持続させる精神領域である。一次過程の思考および快感原則に支配される「幻想」は、それらに支配されるがゆえに、ある不合理で非現実的で一貫性のないストーリーを、表象群を用いて形成することとなる。この幻想の形成力動は、表象形成の始まる乳児期から存在する非常に蒼古的なものであり、一方で、成人しても尚保持される。このように、年齢に関わらず自らに引きこもる時は、現実原則に基づく苦勞のいる満足よりも、快感原則によって気楽で瞬間的で幻想的な満足、すなわち幻想からのリビドー備給に依存するが（Freud, S., 1911）、それゆえに、外的対象との間でのリビドーエネルギー交

換は起こらない。あるいは、外的現実とのエネルギー交換による自己愛の枯渇を避けるために、心的現実である幻想世界に留まるのである。

このように、キレル現象と引きこもる現象はどちらも、幻想状態、すなわち外的現実との関係性の希薄な心的世界へと耽溺する自己愛の枯渇あるいは枯渇の危機に対する防衛、すなわち、自己愛の防衛反応の2様態として説明される。その特徴は、一次過程的思考および快感原則の優位性にある。これらは自我の現実検討能力の脆弱さを示している。

また、Bach, S. (1977) は、「キレル」「引きこもる」といった適切な対人関係を営めない境界例の心的現実の様態に焦点化し、力動検討を行い、その様態と力学を自己愛空想 (Narcissistic Fantasy) によって定義した。彼は自己愛空想の定義を「対象に起源を持つのではなく、自己に向けられた欲動と願望に起源を持つ空想」とし、その病理的特徴を外的現実からの遊離に引き、自己への過度な慰めとして起きるものと力動的に定式化した。また、この定式化は、古典的なキレル力動、引きこもる力動と一致するものである。「対象に起源を持つのではなく、自己に向けられた欲動と願望に起源を持つ空想」、「外的現実からの遊離」とは、幻想世界への耽溺を示しており、また、「自己への過度な慰め」とは、幻想世界において自己愛を満たそうとする努力について言及している。すなわち自己愛の枯渇あるいは枯渇の危機によって引き起こされているのである。

またBachは、自己愛空想を主に境界例の特徴として構成したが、自己愛空想があらゆる人格水準において生じる可能性を指摘している。自己への引きこもりと行動化を特徴的に示す群としては、PTSDによる解離を慢性化させる群(Putnam, F. W., 1997)のように人格構造全体の問題ではなくトラウマ領域に特異的自己愛の枯渇の問題を持つ群や、青年期発達特有の自己愛の枯渇 (Kernberg, O. F., 1984) の問題を有する群が挙げられる。つまり、人格構造や葛藤の構造によって自己愛の枯渇あるいは枯渇の危機の力動がパラメータ化されるのであって、自己愛空想が浮上する力動の背景にあるその力動を検討することで、人格構造の診断・査定が可能になると言えるだろう。

これらの理論検討を経て、本論では自己愛空想を以下のように定義する。

自己愛空想：自己愛の枯渇あるいは枯渇の危機に対する反応、すなわち自己愛の防衛反応。自己愛空想に浸ることによって、個人は自己愛を蓄えようと試みる。人格構造、葛藤の構造によって、自己愛の枯渇あるいは枯渇の危機の力動パターンは特定されるため、あらゆる人格構造水準に起き得る。

2) 境界性人格構造と神経症性人格構造を分化する固着点の発達論的再構成 自己愛空想を生じせしめる人格構造とその発達を検討するために、まずは神経症性人格構造群と境界性人格構造群を分ける発達の固着点を明瞭にし、さらに、従来検討が行われていなかった神経症性人格構造群の中の重度神経症群の発達の固着点を仮説構成する。

a) 前エディプス期発達 小谷 (2002) は、Horner, A. J. (1975) の早期対象関係の発達段階と過程に関連する精神病理図式を Kernberg, O. F. (1996) の理論に加えることで、人格の生成発達ライン

と精神機能の検討の軸を得、臨床的有用性が高まることを指摘した。

Hornerの理論は、Mahler(1972)が示した早期発達段階、すなわち分離個体化過程と対象恒常性獲得過程における固着と精神病理の関連をまとめたものである。これに従えば、分離個体化過程の達成によって発達的に獲得される重要な心的要素は対象恒常性である(Mahler, M. S., et al, 1968)。

Tyson, P. (1996)は対象恒常性の定義について、Mahlerら(1968)の「快適さと愛情の内的な源としての愛の対象機能の表象」に同意しているが、「対象恒常性の獲得によって確固とした自己の感覚とそれとは区別される他者の感覚を持っている」ことと、「母親機能の内化されたものが自己に形を変えることを通して現れるリビドー的对象恒常性の獲得の結果である自己の中の資源から、自身の自己愛の平衡や良い自己への感情を維持する能力を得る」(p 25)ことをその発達の獲得物として加えている。ここで示されている、「確固とした自己の感覚とそれとは区別される他者の感覚」とは、Kernbergの鑑別診断法(1984)の一軸である現実検討「自己と非自己を区別し、知覚や刺激の源泉が精神内界なのか外界なのかを区別する能力」に直接関連する。そして、神経症性人格構造と境界性人格構造における心的要素の違いとして考えられるのは、「自己と非自己を区別し、知覚や刺激の源泉が精神内界なのか外界なのかを区別する能力」と示された現実検討能力、更には、「自己概念と重要な他者概念のそれぞれの統合性、自己、他者の概念に矛盾した知覚、複雑な情緒が統合され、それが体験される程度」としての同一性の軸の基盤を成す。

境界性人格構造以下の群の自己愛空想浮上力動は人格構造的な原因がある。彼らは対象恒常性が内在化されていない、つまり、精神内構造に自己愛の源泉が存在しないという問題を有する。そのために、常に外的現実からのリビドー備給に依存しなくてはならないが、外的現実には常に個人のコントロールの範囲に収まるものではないため、彼らの自己愛は常に枯渇あるいは枯渇の危機に瀕している。そのために彼らは自己愛空想を常態的に示すことになるという力動が考えられる。つまり、境界性人格構造の自己愛空想浮上力動：対象恒常性の獲得の失敗により、自己愛の備給を二者期的な幻想状態に依存するため、現実との関係が幻想からずれると自己愛の危機に瀕することとなる。そのために、リビドー枯渇あるいは枯渇の危機は常に存在し、自己愛空想は常態化する、とまとめられる。

b) 神経症性人格構造の発達 ここでは、早期対象関係発達と構造的発達について神経症的人格という語を用いて再検討したLoewald, H. W. (1979; 1985)を中心に検討する。

彼によれば、神経症的人格は、エディプス性の統制による内的葛藤の保持、情動的自己統制能力、内的な妥協形成と自己防衛の起動が葛藤への解決方法として見出す能力によって特徴づけられる自己責任性を持つ健全な人格とされる。何故なら、エディプス葛藤は、それ以前の取り入れと理想化を再構成するので、超自我はより一貫した機能を行うシステムとなるため、取り入れ物、あるいは表象としてではなく、「三部構造」と言われるに値する構造的性を獲得するからである(Tyson, P. et al, 1984)。つまり、神経症的人格を有する群は、三部構造の確立と自己責任性の獲得に基づく葛藤

保持能力と欲求不満耐性を持ち、自我の力を用いて葛藤の内的解決を行う。

一方で、Freud, A. (1936) に始まり、Bornstein, B. (1951) や Sarnoff, C. (1976a) の主張するように、神経症的人格において重要な三部構造の安定には潜伏期前期の発達が重要とされている。「よく振る舞い、柔軟で、勤勉な子ども」という、いわゆる潜伏期らしい子どもの姿は潜伏期中期以降の像であり、この安定性は、超自我と自我の発達による三部構造の安定化に支えられると見なされている。その後、潜伏期前期は幼児神経症の延長と考えられるようになった。潜伏期前期の児童は新しい超自我による脅威 (Bornstein, B., 1951) や、前潜伏期から持ち越されたエディプス葛藤の残遺物 (Freud, A. 1966) と身体・認知 (一次過程と二次過程の未分化) の機能的発達上の未熟さに起因する現実的問題・困難 (Freud, A. 1966; Shapiro, T., et al, 1976) に彩られ、それに対処するだけの抑圧能力が不十分であるために、投影や投影性同一視、空想形成 (Sarnoff, C., 1976c)、反動形成 (Freud, A., 1936) といった現実認知を歪めることによって対処する防衛を頻用する不安定な個体である。その表層的な姿は、対象恒常性獲得によって得られた「確固とした自己の感覚とそれとは区別される他者の感覚を持ち、自身の自己愛の平衡・良い自己への感情を維持する能力」を失ったかのように見える。それは現代的問題群が示す様態と酷似しているため、彼らはこの時期の固着を持っているものと類推される。

これらの議論から、対象恒常性を発達させ、三部構造のそれぞれの構造体が確立した神経症性人格構造を形成しているにも関わらず、潜伏期前期における対象恒常性の退行に固着を持つためにあたかも対象恒常性未確立の群のように表面的に査定される群が存在するものと考えられる。それが現代的問題を示す重度神経症群であると仮定する。すなわち、安定した神経症性人格構造と重度神経症とされる神経症性人格構造の間にある発達の問題は、潜伏期前期の発達およびその固着を有していると仮定される。

3) 重度神経症群の退行力動の自我心理学的再構成 対象恒常性の退行という仮説を前節において示したが、そのようなことが起こり得るのだろうか。改めて、自我機能と対象恒常性の視点から、重度神経症における退行を自我心理学的な理論構成を行う。

先述のように Mahler らの記述では「対象恒常性によって、実際の母親がリビドー的に利用可能になるのと同じやり方で母親表象が子どもにとって支持、快適さ、愛情をもたらすものとして精神的に利用可能となる」とされているが、この記述には内在化された母親表象、対象恒常性の獲得によって可能になる精神的な能力、そしてその能力を用いる主体としての自我機能の三つが想定されている。また、彼女らは対象恒常性という言葉、表象としても用いることが多い。つまり彼女らは、良い母親対象と悪い母親対象の統合という再接近期の両価性の解決をし (McDevitt, J. B., 1979)、自我機能が全体としての母親表象を不在の母親同様に自我が利用することによって、自己愛および対象愛を安定的に保つことを可能とする過程を指して対象恒常性という用語を用いている。このような用語の不明瞭さから Solnit, A. J. (1982) のように「対象恒常性は動かない現象ではなく

心的機能である」と、対象恒常性そのものが人格構造における機能であると積極的に捉えようとする者もいる。

しかし、表象は機能を持ち得るのだろうか。Sandler, J. (1962) は表象について、多くのイメージから作られる相対的に永続的な組織として定義し、そのイメージは単に精神外界の対象だけではなく、相互関係の中での身体感覚や情動も含むものとした。他にも多くの理論家 (Klein, M., 1930; Segal, H., 1957; Bion, W. R., 1967, p. 110-119) が表象の形成発達と、表象そのものがいかに心的構造形成に貢献するかを記述しているが、表象は内在化されたイメージであり、それをを用いるのは自我であると本論では定義する。つまり本論では対象恒常性を、Mahler らが示した共生期から分離個体化期を経て確立する「快適さと愛情の内的な源としての愛の対象」表象と定義するが、それは内的なイメージの集合であり、機能は持たないものとして捉える。

では、対象恒常性に関与する機能とは何だろうか。自我機能について詳細に吟味を行った Bellak, L. ら (1975) の、自我の対象関係機能の説明がそれに当たる。対象関係機能とは、「分離個体化と対象恒常性の達成に基づく、自己の延長としてではなく、個別の全体性を持った他者として他者を知覚することと、現在の関係を過去の幼乳的關係に影響されるパターン化によらずに認知することを可能とする」機能である。この定義は、対象恒常性という発達による獲得能力の質についての記述を損なうことなく、それを基盤とした自我機能を定義している。また、この対象恒常性を扱う自我の対象関係機能の発達について、Tyson, P. ら (1990) は肛門—再接近期 (1～3歳) の発達過程にあるとしている。この時期の子どもは、身体的要求 (排泄など) をコントロールしたり、両親の示す規範に文句を言うことに成功したりすると、対人関係的な親などの権威との愛着的結びつきを犠牲にすることなく、独立的で自律的に表現する適切な方法を学ぶ。このような外的現実との相互作用の中で、新たに取り入れられた、あるいは改変された表象を通して、幼児は欲求不満に耐える力を身に付ける。さらに、現実原則の発達と思考の能力の発達は促進され、先述のように、今の欲求とそれを満たす行動の間の架け橋が作られる (Bion, W. R., 1967)。その結果として、子どもは自己愛を維持することができ、怒りや欲求不満の時々暴発にも関わらず、全体としての自分を感じることを基本的に肯定的なものとして捉えることができるようになる。これが葛藤保持能力の基底ともなる自我および養育的超自我に基づく現実原則の芽生えである。このように、対象恒常性の獲得と、それを扱う自我、および養育的超自我の取り入れの関係は非常に密接である。超自我の芽が養育的なものとして取り入れられる過程と対象恒常性という一貫して愛着を与えてくれる母親表象の内在化はほぼ並行しており、自尊心、自己愛、自律性の基盤となるものと考えられる。

これらの理論から、本研究では、Bellak, L. ら (1975) と Tyson, P. (1990) を基盤に、以下のように自我の対象関係機能を定義する。

対象恒常性を扱う自我の対象関係機能は、対象恒常性獲得過程に並行して形成され、「分離個体化期／肛門期の発達を通じて獲得される対象恒常性の獲得達成に基づく自我機能であり、外的現実と

精神内の現実の境界を形成維持する機能である。この自我機能が起動する結果として、怒りや欲求不満の時々、の暴発にも関わらず、全体としての自分を感じることが基本的に肯定的なものとして捉えることができるようになり、そのため自尊心、健康な自己愛が維持され、また外的対象へのリビドー備給も維持される」。つまり、対象恒常性からの自己愛へのリビドー備給は、対象関係機能の起動によって行われる。

この定義によって、対象恒常性と対象関係機能は分化され、対象恒常性そのものが獲得されていても、自我機能が退行することの可能性についての吟味が可能になる。

ここまでの理論から、重度神経症群の自己愛空想浮上力動を以下のように仮説化する。

重度神経症群の自己愛空想浮上力動：自我の対象関係機能の退行によって対象恒常性からの自己愛のリビドー備給が妨げられるため、リビドー枯渇あるいは枯渇の危機が起き、自己愛空想を浮上させる。

ここで先述の、Kernberg, O. F. (1996) による「欲動領域特異的退行」仮説との整合性について検討する必要があるだろう。「欲動領域特異的退行」が引き起こされるということは、三部構造の均衡が欲動の浮上によって必要以上に乱れる構造を有するということである。つまりそれは、重度神経症群の固着によって獲得されなかった人格構造内の構造体あるいは構造体間関係の未成熟に起因するものであろう。

4) 退行の慢性化を留める人格構造体 まずは自我の退行を防ぐ要件を理論的に構成し、それと潜伏期前期発達に関連性を述べ、本章の課題であった重度神経症群の退行力動を慢性化させる人格構造とその発達過程の仮説を提示する。

a) 自我の退行を防ぐ要件 筆者は、本論に先立って、潜伏期前期および後期の臨床群児童の事例を用い、潜伏期前期発達における心的安全空間の安定プロセスの重要性を強調し、次いで行動化の特徴を持つ困難児事例を検討し、その治療機序において自己および心的空間の境界が安定することの意味を示してきた(川村, 2011; 2009a)。これらに示された臨床群児童は一様に自己境界が脆弱な特徴があり、本論で問題としている対象関係機能の脆弱性や自己愛空想への過剰な依存が明らかであった。そして、彼らが健全な発達に戻るプロセスにおいて治療機序となった心的体験が、自己境界の安定化に寄与する心的安全空間の形成にあると考察された。また、特に後者の研究においては、自己愛空想は自己境界の脆弱性を持つ群において、自己愛の保持に対する危険信号としての不安反応によっても生じる可能性があることを示した(川村, 2009a)。

自己境界、自我境界概念は Tausk, V. (1919), Federn, P. (1932), Schilder, P. (1933), Isakower, O. (1938) らが、健全に心が働くためには、心という空間が存在すること、つまり空間を形成するのに必須要素である境界が重要であることを考察してきている。それらを継いで Grotstein, J. S. (1978) が、心における「空間」は重要な心的側面であるにも関わらずたびたび無視されることを批判し、自我が働く空間としての内的空間 (inner space) の重要性を指摘した。Hartmann, H. (1959)

が葛藤外の自我領域について指摘したことと合わせると分かりやすいが、明確な空間があって初めて個人は、悩むべき葛藤あるいは自らのものと認め、用いていくべき欲動エネルギーと、悩み自らを構造化していく主体（自我）を分け、自らを成長させていくことが可能となる（Grotstein, J. S., 1978）。しかしその後は、境界性人格構造群治療に対する関心の高まりの中で、直接的に心的空間について概念化した Bion, W. R. (1957, 1959) のコンテナ（Container）理論とその中で起きる力動としての投影性同一視が強調される流れが主流となり、特に対象関係論において、治療場面におけるセラピストがコンテイン（Contain）することの技法的重要性が強調されるようになった。そのため、Grotstein がそもそも強調していた自我が機能するための空間としての個人内における内的空間側面が再度過少視される傾向が生じ、処理し保持する空間が外的他者としてのセラピストに預けられるのではなく、内的に保持されることの重要性について議論されることに注目が集まらなくなっていた。このように、神経症性人格構造以上の個人の持つ自己責任性（Loewald, H. W., 1985）の能力について目を向けることが少なくなっていく。コンテイン理論における基本的力動である投影性同一視力動は、先にも示したように基本的に二者関係力動であり、境界性人格構造における対象関係基本様態であるため、神経症性人格構造群の特徴である三者関係力動に連なる心的空間の説明には不十分である。この流れに対し、小谷（2006 p. 33-34）は、自己心理学および対象関係論的な潮流に自我心理学的視点を統合する形で、心的安全空間理論を提出した。この心的安全空間とは、「あらゆる脅威や恐れから個人が自由でいられる空間であり、精神的な世界、外的現実世界どちらの現象も含む空間」（Kotani, 2004）であり、「人が外的、身体的世界でも心理学的、精神的な世界においても現実を体験することができる時に生じる空間である」（Kotani, 2005, p. 43）と定義される。力動的には安全感と安全空間の違いを説明する中で、コンテナの器としての意味を強調し、個人内に安全空間が創成・生成されることの重要性を示している。つまり、外的安全空間であった器の体験を「現実原則の融合のもとで」内在化させ、自分自身の心の中の安全の器、すなわち空間を作り出す過程を仮定している。外的安全空間が内的安全空間として内在化される過程は、川村ら（2011）によってまとめられているが、そこには神経症水準者であっても短時間で内的安全空間を失ったり再生したりすることも示されている。

これらの理論から、たとえ葛藤やエネルギーが賦活された状態であっても自我が退行せずに機能維持されるための要件として、心的空間が人格構造内に内在化されていることが必要であり、その内在化過程について理論構築されているものが心的安全空間理論であると考えられる。

b) 潜伏期前期発達と心的安全空間発達 神経症性人格構造者の人格構造的病理とその固着については理論的展開が不十分である。先に整理した神経症性人格構造の発達理論は、Horner らの対象恒常性や Kernberg の人格構造理論は、境界性人格構造群を神経症群と分ける神経症性人格構造発達の早期段階に焦点化しており、Loewald はその後のエディプス期における発達に言及することで、その特徴を描いている。しかし、ここまでは人格構造としての三部構造要素の確立までの発達

である。Bornstein や Sarnoff らの潜伏期研究や、Shapiro, T. と Perry, R. (1976) の理論では、神経症性人格構造の安定は潜伏期中期にあるとする。潜伏期前期は投影や空想形成、つまり自己内に葛藤を維持することが困難であるが故に容易に神経症的性格を退行させ、外的現実とも精神的現実とも問われない空想領域において葛藤を処理することに依存する不安定な個体であることが示されている (Sarnoff, C., 1976c)。

このように対象恒常性の確立によって規定される神経症性人格構造は、構造の安定までの過程が存在し、健常群としての神経症性人格構造群から、いわゆる神経症群としての神経症性人格構造群、さらには境界性人格構造と判別されやすい重度神経症群としての神経症性人格構造群のスペクトラムが存在すると仮定される。

臨床的あるいは養育的に、対象恒常性を人格構造の中に安定させ、自我同一性を確かなものにするようためには対象恒常性の安定化過程の発達課題を見出す必要がある。1970年代を境に境界性人格障害が頻繁に見られるようになって以降、後エディプス、前エディプス期の人格発達課題の混乱が生じ、病理が重く見られがちとなった (Kotani, H., 2005)。そして、神経症水準の自我の力を有する群の能力ではなく、むしろ病理的側面を焦点化するために、後エディプス期よりも前エディプス期の早期発達の問題に関心が向いたのである。

先に、心的安全空間の内在化過程を川村ら (2011) がまとめたこと述べたが、この過程は、古典的には、個室での臨床の世界にはっきりと「社会」を置いた、Erikson, E. H. (1950; 1959) が示している潜伏期発達過程と近似している。Erikson は一次集団 (家族) から二次集団 (学校やコミュニティ) へ移行する中で、現実的な壁をさまざまに体験する過程を、競争と妥協などの記述を通して示している。そこでまだ三部構造が不安定で未熟な個体である潜伏期前期児童は、新しい体験に出会い、時に敗北し、時に失敗を経験する (Freud, A., 1936; Bornstein, B., 1951; Sarnoff, C., 1976a c)。しかし、たとえ敗北や失敗を体験しても、自らを鍛える喜びによって潜伏期後期までにはいったんの自己同一性の確立へと向かう (川村, 2011)。そして、先にも示したように、精神、身体、認知機能の未熟性ゆえにこの危機が非常に強く、頻繁にこの危機が体験されるのが潜伏期前期なのである。

また、潜伏期発達における、この現実的な壁をさまざまに体験する過程において、超自我の修正がなされ (Tyson, P. & Tyson, R., 1984)、自律性が獲得されること (Erikson, E. H., 1950; 1959) が必須である。前潜伏期に獲得された超自我は、一次集団における規範を内在化したものであり、それは部分的には普遍的 (妹などの小さい子をいじめてはいけない) で、部分的にはそうではない (祖父が食事に箸を付けるまで他の家族メンバーは誰も食事に手を付けてはいけない)。あるいは、ある家庭は非社会的であり、あるいは規範そのものが脆弱でもある。それが二次集団としての学校、コミュニティにおいて、両親以外の権威や、兄弟以外の同輩と現実的に関係を持つことで、もともと有していた超自我の内容の書き直しが起こる。そのような書き直しは、道徳心、そして良心として発展していくものである。これが潜伏期前期の超自我発達過程における正常な過程であるが、先

述の通りそれが起こらないまま、原始的で厳格な超自我が残ると、不安定な超自我による自我機能に対する支配が起きる。すなわち、原始的で厳格な超自我が、自我の機能する空間を奪うことが起きるのである。

また、Kernberg, O. F. (1989a) は社会がIT化したことと潜伏期発達への影響について論じている。現代のIT社会化や、世代間境界が薄くなり、権威性が脆弱化したことについては多くが指摘しているが、IT社会化によって、壁としての精神的危機、あるいは痛みから逃げる方略が増え、世代間境界と権威性の脆弱化によって、壁を突き付ける現実が減少したと言えよう。このような社会状況から、精神疫学的に重度神経症群が急激に増加したと考えると、潜伏期前期発達における現実的壁体験による心的安全空間の内在化、および超自我発達が進まないことによって、重度神経症群となるという、彼らの固着は潜伏期前期とする論理構造が明瞭となる。以上の理論検討の帰結として、重度神経症群の固着は、潜伏期前期における心的安全空間内在化過程にあると仮定できる。では、重度神経症の特徴である欲動領域への「領域特異的退行」と潜伏期前期発達は論理的にどのように連なるだろうか。

Winicott, D. W. (1971) は、外的対象への依存を撤退させ内在化させる過程、あるいは哲学的思考、自由連想といった創造的な活動を行う時に起きる独自の現象としての中間領域と遊びの概念を示した。この中に示されている、本能欲動、すなわちリビドーや攻撃性が意識されると遊ぶことは損なわれるというのは、本能欲動が起きれば、本能欲動の向かう対象も意識されるために、中間領域的現象そのものも損なわれてしまうことを示している。一方で、ここで示されている興奮とは、自我心理学的に言えば、快感原則に基づく心的エネルギーの高まりである。先に述べたように幻想は快感原則に基づいて成立しているものである。外的現実が意識されるような現実原則は使われず、快感原則に特化したままに他者との場に存在することができる、それが中間領域であるとも言える。また、川村 (2009a:2011) は、潜伏期児童遊戯療法の事例研究から、心的空間の境界が脆弱な群は本能欲動の賦活や外的対象への意識が上がると、自己愛空想に退行することも起きることを示した。これは、ここまでの論から、心的安全空間の内在化が不十分であるために、本能欲動の賦活や外的対象の意識によって中間領域が損なわれることで、自己の幻想領域すなわち自己愛空想へ撤退するものとして説明できる。

潜伏期は、「欲動の潜伏」の時期とされており、特に性愛化されたりリビドー欲動が潜伏されないと人格発達に支障が起る。なぜなら、まだ性器性の統裁能力がないため、欲動が刺激されると、その防衛に自我エネルギーの多くが費やされるために、現実における活動を可能にするためのエネルギー量が不足するのである。この論に則れば、ある一群は、潜伏期に過剰にリビドー欲動に晒されることによる心的安全空間内在化の失敗の固着があるものと考えられる。そのため、成人しても欲動領域特異的に退行が引き起こされるという論も成り立つ。だが、いずれにせよ、内的空間が損なわれた時に衝動が賦活した場合、強い不安（精神病不安）が引き起こされることについては、川村

(2009b) が、大集団という特異的で、健全な群でもひどく退行的になる状況における力動について説明したものによっても示される。この論からも、重度神経症群が心的安全空間を十分内在化していないのであれば、容易に衝動によって精神病不安のような強い不安が生じるために、それは自己愛の枯渇あるいは枯渇の危機として自我に認識され防衛反応が起きるであろうと考えられる。以上、本能欲動が心的安全空間を維持することへの阻害要因となると仮説化した。Kernberg が神経症性人格構造を有する人格障害群は、リビドーや攻撃性にまつわる領域特異的な退行を示すとしたが、それはここまでの理論展開から、快感原則とは区別される本能欲動の賦活によって空間性が損なわれるために退行が起きるものと考えられる。

これらの理論構成から、重度神経症群の自己愛空想力動について、以下のようにまとめることができる。

重度神経症群は、潜伏期前期固着を有する。つまり、対象恒常性は確立しており、基本的な自己愛保持能力と、人格構造要素の基本的素因を獲得している。それにも関わらず、自己愛空想の慢性化を示すのは、心的安全空間の形成過程の途上にあるかあるいは未発達であり、また、厳格な原始的超自我が残存するために、内的に欲動エネルギーの浮上が起きると自我が起動するための心的空間の脆弱な境界が揺らがされる。そのため、自我が起動するための心的安全空間が維持されず、対象関係機能が退行し自己愛空想が浮上する特徴を持つ。

3. 結論

本論は、「キレル」「引きこもる」といった顕現様態を示し、現行の診断基準では容易に重篤な診断を受けてしまう神経症群を重度神経症群と定位し、彼らを抽出するための力動的な理解を理論的に検討した。本論ではいったん確立された診断・査定基準において理解が難しい群を改めて力動的な理解に立ち戻り検討する必要性を示したものである。しかし、本論では理論検討に留まっているため、事例検討が積み重ねられ、本論で提示した理論仮説の妥当性が精緻化されていくことが望まれる。

引用文献

- Bach, S. "On Narcissistic Fantasies." *International Review of Psycho-Analysis*, 4, 1977, pp 281-293.
- Bellak, L. & Meyers, B. "Ego Function Assessment and Analyzability." *International Review of Psycho-Analysis*, 2, 1975, pp 413-427.
- Bion, W. R. "Differentiation of the Psychotic from the Non-psychotic Personalities." *International Journal of Psychoanalysis*, 38, 1957, pp 266-275.
- Bion, W. R. *Experiences in Groups*. Basic Books, 1959.
- Bion, W. R. "A Theory of Thinking." In *Second Thoughts*. Maresfield Reprints, 1967.
- Bornstein, B. "On Latency, 1." *Psychoanalytic Study of the Child*, 6, 1951, pp 279-285.
- Erikson, E. H. *Childhood and Society*. W. W. Norton & Company, 1950.
- Erikson, E. H. *Identity and the Life Cycle; Selected Papers in Psychological Issues*. International

- Universities Press, 1959.
- Federn, P. "Ego Feelings in Dreams." *Psychoanalytic Quarterly*, 1, 1932, pp 511-542.
- Freud, A. *The Ego and Mechanisms of Defense*. International Universities Press, 1936.
- Freud, S. "Formulation on the Two Principles of Mental Functioning." In *Complete Works*, 12, (1958). Hogarth Press, 1911.
- Grotstein, J. S. "Inner Space: Its Dimensions and Its Coordinates." *International Journal of Psycho-Analysis*, 59, 1978, pp 55-61.
- Hartmann, H. *Ego Psychology and the Problem of Adaptation*. Hogarth Press, 1959.
- Horner, A. J. "Stages and Processes in the Development of Early Object Relations and their Associated Pathologies." *International Review of Psycho-Analysis*, 2, pp 95-105, 1975.
- Isakower, O. "A Contribution to the Pathopsychology of Phenomena Associated with Falling Asleep." *Journal of Psychoanalysis*, 19, pp 331-345, 1938.
- 川村良枝「現代的病理を呈する困難児童の遊戯療法における治療機序仮説の検討」『精神療法』 第35巻第1号 2009a pp 79-85.
- 川村良枝「大集団療法」小谷英文編『現代のエスプリ (504) グループセラピの現在』 ぎょうせい 2009b pp. 71-84.
- 川村良枝「初期過程」『現代心理療法入門』 PAS心理教育研究所出版部 2010 pp. 173-181.
- 川村良枝「潜伏期の心的安全空間力学」小谷英文編『モノグラフ ICU21世紀COEプログラム「平和・安全・共生」研究教育：『心的安全空間の生成』グループ』 国際基督教大学 高等臨床心理学研究所 2011 pp. 32-42.
- 川村良枝・髭香代子・伊藤裕子「小集団と心的安全空間」小谷英文編『モノグラフ ICU21世紀COEプログラム「平和・安全・共生」研究教育：『心的安全空間の生成』グループ』 国際基督教大学 高等臨床心理学研究所 2011 pp. 110-121
- Kernberg, O. F. "Differential Diagnosis in Adolescence." *Severe Personality Disorders*. Yale University Press, 1984.
- Kernberg, O. F. "The Temptations of Conventionality." *Psychoanalysis; Toward the Second Century*. Yale University Press, 1989a.
- Kernberg, O. F. "Impasse and Interpretation." *International Journal of Psycho-Analysis*, 70, 1989b, pp 173-177.
- Kernberg, O. F. 「人格障害の分類のための精神分析的なモデル」岩崎徹也訳『精神分析研究』 第40巻第3号 1996 pp 55-168.
- Klein, M. "The Importance of Symbol-Formation in the Development of the Ego." *International Journal of Psycho-Analysis*, 11, 1930, pp 24-39.
- Klein, M. "Notes on Some Schizoid Mechanisms." *Envy and Gratitude and Other Works*. 1975. De-lacorte Press/Seymour Laurence, 1946
- Kotani, H. "Safe Space in a Psychodynamic World." *International Journal of Counseling and Psychotherapy*, 2, 2004, pp 87-92.
- Kotani, H. "Contemporary Meanings of Psychological Space for Dynamic Psychotherapy." *International Journal of Counseling and Psychotherapy*, 3, 2005, pp 31-47.
- 小谷英文「人格障害と人格理論」 下山晴彦・丹野義彦編『講座臨床心理学4 異常心理学Ⅱ』 東京大学出版会 2002 pp 27-47.
- 小谷英文「安全空間の心理学」『現代のエスプリ別冊 心の安全空間 家庭・地域・学校・社会』 至文堂 2006 pp 24-36
- Loewald, H. W. "The Waning of the Oedipus Complex." *Papers on Psychoanalysis*, 1980, Yale University Press, 1979, pp 384-404.

- Loewald, H. W. "Oedipus Complex and the Development of Self." *Psychoanalytic Quarterly*, 54, 1985, pp 435-443.
- Mahler, M. S. "Rapprochement Subphase of the Separation-Individuation Process." *Psychoanalytic Quarterly*, 41, 1972, pp 487-506.
- Mahler, M. S. & Furer, E. *Infantile Psychosis. On Human Symbiosis and the Vicissitudes of Individuation I*. International Universities Press, 1968.
- McDevitt, J. B. "The Role of Internalization in the Development of Object Relations during the Separation-Individuation Phase." *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 27, 1979, pp 327-343.
- McWilliams, N. *Psychoanalytic Diagnosis*. The Guilford Press, 1994.
- Ogden, T. H. On Projective Identification. *International Journal of Psycho-Analysis*, 60, 1979, pp 357-373.
- Putnam, F. W. *Dissociation in Children and Adolescents ; A Developmental Perspective*. The Guilford Press, 1997.
- Ritvo, S. & Solnit, A. J. "The Relationship of Early Ego Identifications to Superego Formation." *International Journal of Psycho-Analysis*, 41, 1960, pp 295-300.
- Sandler, J., Dare, C. & Holder, A. "Acting Out." *Patient and the Analyst : Basis of the Psychoanalytic Process*. Karnac Books, 1973.
- Sandler, J. & Rosenblatt, B. "The Concept of the Representational World." *Psychoanalytic Study of the Child*, 17, 1962, pp 128-145.
- Sarnoff, C. "The Structure of latency." *Latency*. Jason Aronson, 1976a
- Sarnoff, C. "Sexual development during the latency age." *Latency*. Jason Aronson, 1976b.
- Sarnoff, C. "Projection and paranoia." *Latency*. Jason Aronson, 1976c.
- Schafer, R. "The Loving and Beloved Superego in Freud's Structural Theory." *Psychoanalytic Study of the Child*, 15, 1960, pp 163-188.
- Schilder, P. "The Vestibular Apparatus in Neurosis and Psychosis." *Journal of Nervous and Mmental Disease*, 78, 1933, pp 137-164.
- Segal, H. *Introduction to the Work of Melanie Klein*. Basic Books, 1964.
- Shapiro, T. & Perry, R. "Latency Revisited." *Psychoanalytic Study of the Child*, 31, 1976, pp 79-105.
- Solnit, A. J. "Developmental Perspectives on Self and Object Constancy." *Psychoanalytic Study of the Child*, 37, 1982, pp 201-220.
- Tausk, V. "On the Origin of the 'Influencing Machine' in Schizophrenia." R. Fliess (Eds.), *Psychoanalytic Reader*. 1948, International Universities Press, 1919
- Tyson, P. "Object Relations, Affect Management, and Psychic Structure Formation." *Psychoanalytic Study of the Child*, 51, 1996, pp 172-189.
- Tyson, P. & Tyson, R. L. "Narcissism and Superego Development." *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 2, 1984, pp 75-98.
- Winnicott, D. W. "The Theory of the Parent-Infant Relationship -further Remarks." *International Journal of Psycho-Analysis*, 43, 1962, pp 238-239.
- Winnicott, D. W. *Playing and Reality*. Tavistock Publications, 1971.

Dynamics of Rising Borderline Reactions for Severely Neurotic Patients — Hypothesis of Differential Assessment with Narcissistic Fantasies —

Yoshie KAWAMURA

Abstract

In line with the structural, developmental and dynamic theory of psychoanalysis, the author studied and theorized about two cases of severe neurotic patients, the number of which has been increasing recently. One patient showed aggressive tendencies, while the other one was withdrawn. These patients cannot fully interact with reality and are not receiving proper treatment because of the present system of diagnosis and assessment. The author, initially using the theory of narcissistic fantasy, constructed hypotheses which maintain that their personality structures are due to the failure to establish psychological space through the early-latency phase, not due to a failure to establish triadic structures through the Oedipal phase. Moreover, the dynamics for a differential assessment of severe neurosis is hypothesized in comparison with the dynamics of psychotic personality organization, borderline personality organization, and higher neurotic personality organization.

Key words; Severe Neurosis, Borderline Reactions, Narcissistic Fantasies, Differential Assessment, Latency